

病草紙と『正法念処経』「身念処品」

山本聡美（大分県立芸術文化短期大学講師）

病を主題とし、時には病者を嘲笑するかのような表現を含む「病草紙」が、如何なる典拠に基づき、どのような目的のために制作されたものであるのかについて謎は多い。本発表では、「病草紙」の典拠が『正法念処経』「身念処品」に求められることを指摘する。

研究史を概観すると、福井利吉郎「六道絵に就て」（『心理学及芸術の研究（下）』改造社、一九三一年）で、「病草紙」を「地獄草紙」「餓鬼草紙」と一連の六道絵の一部「人道」と見なす説が唱えられて以後、これを宗教画、就中六道絵の枠組みで解釈する見方は根強い。また、実際の病を記録的に表したものとする見方が、医学史研究の分野では広く支持されており、佐野みどり「病草紙研究（上）（下）」（『國華』一〇三九・一〇四〇、一九八一年）でも、典拠に関しては「当時の医師達の中に伝えられていた症例集的な先行作品」の存在が指摘されている。ただし佐野氏は一方で、その制作動機に関して、人間存在の断面を忌まわしい題材で描き表わすことで結縁への契機となさんとする発想があったと位置付ける。「病草紙」の制作動機を後白河院周辺の宮廷文化の特質から解釈する見方も、福井氏以来継承され、佐野氏や、近年の加須屋誠「日本美術史のなかの『他者』、そして／あるいは、『他者』としての美術史—病草紙の観者は誰か？—」（『美術史と他者』、晃洋書房、二〇〇〇年）、佐藤康宏「都の事件—『年中行事絵巻』・『伴大納言絵巻』・『病草紙』」（二〇〇一—二〇〇三年度科学研究費補助金研究研究成果報告書『描かれた都市 中世絵画を中心とする比較研究』、二〇〇四年）でも、後白河院周辺での制作・鑑賞を前提とした議論が深化している。以上の先行研究においては「病草紙」を、六道のうち人道を表す宗教的テーマ、実際の病が表された記録的テーマ、院政末期の貴族社会における嗜好性が発露されたテーマ、のいずれかあるいはそれらを複合した観点から解釈することが試みられてきた。しかし未だ決定的な解明には至っていない。「病草紙」の主題や制作意図が、今ひとつはっきりしない理由の一つに、詞書と画面内容の典拠が不明であるということがあげられる。

発表者は「病草紙」各段の内容を、一連の制作が指摘されている「地獄草紙」「餓鬼草紙」の典拠経典の一つでもある『正法念処経』の経文と対照した。その結果、「病草紙」各段に表された症状は、同経第六十四巻～第七十巻「身念処品」に記述される、因果応報によって引き起こされる病の諸相と全て一致していることが明らかとなった。このことによって、本絵巻もまた、「地獄草紙」「餓鬼草紙」と同じく経典に基づいて描かれたものであることが判明する。今後、平安時代末期の六道観や、本絵巻の制作主体と捉えられえいる後白河院周辺の文化的環境を論じる上でも、このことは重要な視角となるはずである。

なお本発表で取り上げる「病草紙」とは、平安時代末期に制作され、かつて関戸家に伝来した十五図及びこれと一連のものと考えられる断簡を併せた二十一図を指す。今回の発表では、特に「二形」（京都国立博物館蔵）及び「小法師の幻覚を生ずる男」（香雪美術館蔵）の場面を中心に経文と画面内容との比較を行い、「病草紙」が『正法念処経』の教義を踏まえて制作されたものである点を論証する。